

平成16年3月29日

水産庁
独立行政法人水産総合研究センター
西海区水産研究所

平成15年度第2回東シナ海漁況海況予報

- 2004年9月までの期間の東シナ海から日本海西部の海域における海況と漁況について、別表の水産関係機関が検討し、独立行政法人水産総合研究センター西海区水産研究所がとりまとめた結果 -

今後の見通し(2004年9月までの期間)

海況

- (1) 鹿児島南方海域の黒潮は、前半は接岸から離岸、後半は離接岸をくり返しながら経過する。
- (2) 九州西方の対馬暖流水は、前半は「東寄り」、後半は「西寄り」で経過する。
- (3) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み～やや高め」で経過する。

漁況(来遊量予測)

- (1) マアジ：前年を上回る。
- (2) マサバ：前年並み。
- (3) ゴマサバ：前年並み。
- (4) マイワシ：極めて少ない。
- (5) ウルメイワシ：前年・平年を下回る。
- (6) カタクチイワシ：前年・平年並み。

1. 本予報は水産庁のホームページ(<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>)、水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査等推進対策委託事業のホームページ(<http://abchan.job.affrc.go.jp/gk15/15gkindex.htm>)に掲載されます。
2. 本予報の内容等に関する問い合わせ先は、以下の通りです。
水産庁増殖推進部漁場資源課沿岸資源班 担当：竹葉・狭間
住所：〒100-8907 東京都千代田区霞が関1-2-1
電話：03-3502-8111(内線7376) 03-3501-5098(直通)
ファックス：03-3592-0759
電子メール：toru_hazama@nm.maff.go.jp
水産総合研究センター西海区水産研究所企画連絡室
住所：〒851-2213 長崎市多以良町1551-8
電話：095-860-1662 ファックス：095-850-7767
電子メール：kiren@snf.affrc.go.jp
(海況担当：中川倫寿 095-860-1623；漁況担当：檜山義明 095-860-1634)

参加機関

山口県水産研究センター	沖縄県水産試験場
福岡県水産海洋技術センター	(社)漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所
長崎県総合水産試験場	
熊本県水産研究センター	
鹿児島県水産試験場	

平成 15年度第 2回東シナ海海況予報

1. 今後の見通し(2004年 4月 ~ 2004年 9月)

(1)海流および水系分布

・薩南海域における黒潮北縁域の位置は,前半は「接岸」から「離岸」,後半は「離岸」から「離接岸をくり返す変動」で経過する。

・九州西方における対馬暖流水の分布は,前半は「東偏」,後半は「西偏」で経過する。

(2)表層水温

・前半には,山口県沿岸・沖合,対馬東水道,壱岐水道,五島西沖,五島灘,西薩・甑沖,薩南沿岸,黒潮域,大陸棚上は「平年並み~やや高め」,天草西沖,沖縄島周辺海域では「平年並み」で経過する。

・後半には,山口県沿岸・沖合,対馬東水道,壱岐水道,五島西沖,五島灘,大陸棚上は「平年並み~やや高め」,天草西沖,西薩・甑沖,薩南沿岸,黒潮域,沖縄島周辺海域では「平年並み」で経過する。

2. 経過 (2003年 10月 ~ 2004年 3月)

1. 大陸棚上

(1)水系

中国大陸沿岸水は 10~ 1月は「西偏」,2・3月は「東偏」で経過。

(2)海面水温

10・11月: 北部「やや高め」,南部「かなり高め」。

12月: 北部,南部とも「やや高め」。

1月: 北部,南部とも「平年並み」。

2月: 北部「やや低め」,南部「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1)海流・水系

沖縄北西方の黒潮の流路は,秋季,冬季ともに「平年並み」.流量は,秋季は「平年並み」,冬季は「かなり少なめ」で経過。

薩南海域における黒潮北縁域は,11月は「接岸」,2月は「離岸」,他の月は「離接岸をくり返す変動」で経過。

(2)海面水温

10月:「かなり高め」。

11月:「やや高め」。

12・1月:「かなり高め」。

2月:「やや高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1)海流・水系

対馬暖流水の分布位置は、10～1月は「西偏」、2・3月は「東偏」で経過。

(2)表層水温

山口県沖合：10月「平年並み」、11・1月「やや高め」、3月「平年並み」。

山口県沿岸：10月「やや高め」、11・1月「かなり高め」、3月「やや高め」。

対馬東水道：10月「平年並み」、11・12月「やや高め」、1月「かなり高め」、2・3月「平年並み」。

壱岐水道：2月「平年並み」、3月「かなり高め」。

五島西沖・五島灘：11月「やや高め」、2・3月「平年並み」。

天草西沖：3月「やや低め」。

西薩 甕沖：11月「やや高め」、3月「平年並み」。

薩南沿岸：11・3月「平年並み」。

薩南沖合：11月「平年並み」、3月「やや低め」。

沖縄島南東：10月「かなり高め」、11月「平年並み」、3月「やや低め」。

(3)表層塩分

山口県沿岸・沖合：10・11月「平年並み」、1月「やや低め」、3月「平年並み」。

対馬東水道：10～12月「平年並み」、1～3月「やや高め」。

壱岐水道：2月「やや高め」、3月「かなり高め」。

五島西沖：11・2月「平年並み」、3月「やや高め」。

五島灘：11月「平年並み」、2月「やや高め」、3月「平年並み」。

天草西沖：3月「平年並み」。

西薩 甕沖：11・3月「やや高め」。

薩南沿岸：11月「はなはだ高め」、3月「平年並み」。

薩南沖合：11月「やや高め」、3月「やや低め」。

沖縄島南東：10月「平年並み」、11・3月「やや高め」。

3.現況(2004年3月)

(1)大陸棚上

海面水温は北部では「かなり低め」、南部では「平年並み」。

(2)黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「接岸」。海面水温は「平年並み」。

(3)対馬暖流域

海面水温は「平年並み～やや高め」。

(註)引用符「」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」：約22年に1回程度の出現確率

「かなり」：約7年に1回程度の出現確率

「やや」：約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」：約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域あじ・さば・いわし長期漁況予報

今後の見通し(2004年4月～2004年9月)

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚(2004年級群(2004年生まれ))、1歳魚(2003年級群)、2歳魚(2002年級群)。魚の大きさは、あじ・さばは尾叉長、いわしは被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年・平年を上回る。

(3) 魚体：15～25cmの1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が主に、5～15cmの0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と25cm以上の2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年並みで平年を下回る。

(3) 魚体：25～28cmの1歳魚(豆・小銘柄)が主に、15～25cmの0歳魚(豆銘柄)も漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年並みで平年を上回る。

(3) 魚体：25～30cmの1歳魚(豆・小銘柄)が主に、15～28cmの0歳魚(豆銘柄)と30cm以上の2歳魚(中銘柄)以上も漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量：極めて少ない。

(2) 漁期・漁場：まとまった漁場は形成されず、散発的に沿岸域で漁獲される。

(3) 魚体：15～18cmの1歳魚(中羽銘柄)が主に、15cm以下の0歳魚(カエリ・小羽銘柄)も漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量：前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：漁期後半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は18cm以上の1・2歳魚(大羽銘柄)が、漁期後半は5～15cmの0歳魚(小・中羽銘柄)が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量：前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：主に5～7月に沿岸域に漁場ができる。

(3) 魚体：4月は10cm以上の1歳魚(大羽銘柄)に3～6cmの0歳魚(シラス・カエリ銘柄)が混じり、5月以降は5～10cmの0歳魚(カエリ・大羽銘柄)が主に漁獲される。

注：「前年」は2003年4月～2003年9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」は±20%の範囲。

漁況の経過（2003年10月～2004年1月）および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

対馬暖流域（東シナ海、九州西・北岸域、日本海）に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980～1990年代に増加し1992～1998年には高水準を維持した。その後、1998～2000年の加入量減少のため資源は減少傾向を示したが、2001～2002年の加入量は1994～1997年の水準に回復した。対馬暖流域におけるマアジの漁獲量は、1980～1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2001年は13～15万トンに減少し、2002年は13万トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

対馬暖流域に生息するマサバの資源量は1975～1990年に漸減した後、1991～1996年は増加傾向を示したが、1997年以降減少し、2000～2002年は低い水準にある。対馬暖流域におけるマサバの漁獲量は、1970年代後半には27～30万トンであったがその後減少し、1990～1992年には13～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降漁獲量は増加傾向を示し、1996年には40万トンに達したが、1997年は21万トンに大きく減少し、2001年は75千トン、2002年は80千トンと低い水準にある。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に分布するゴマサバの資源量は、1997～1999年に増加した後、同程度の水準を保っている。東シナ海、日本海におけるゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移している。1999年に近年で最高の88千トンが漁獲された後、2000年は46千トン、2001年は63千トン、2002年は45千トンと推移している。

(4) マイワシ対馬暖流系群

1980年代後半から1990年代前半にかけて、対馬暖流域においてマイワシは多く漁獲されたが、その後急激に漁獲量は減少した。2001～2002年の九州西・北岸域、日本海における漁獲量は、約1000トンであった。近年では、1999年には0歳魚がやや多く、0歳魚主体に漁獲量が増加したが、その後は加入量が少ないため資源は極めて低位で推移している。また、親魚量も少ないため、資源が急速に回復する可能性は低い。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

近年の対馬暖流域におけるウルメイワシの漁獲量は、1993年に最大となったあと、2000年まで漸減傾向にあった。2001年と2002年は0歳魚の加入量がやや多かったため、資源量はやや上向いたものの、2003年の加入量は過去2年より少ないため、再び減少傾向にある。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

1990年代以降では、1995、1996年および1998～2000年にかけて資源は高水準で推移した。2001年の夏期までは沿岸域を中心に好漁が続いていたが、2001年秋期以降は加入量が少ない状態がしばらく続いた。2003年春季以降は平年並みの漁模様である。

2. 漁況の経過

2003年10月～2004年1月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖、五島西沖および東シナ海中部が中心であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計7万7千トンで前年(2002年10月～2003年1月)の8万7千トンと同程度であった。マアジは1万9千トンと前年(1万7千トン)並み、さば類は4万1千トンで前年(5万6千トン)を下回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、海域により差があるが、全体的には平年を下回って前年並みであった。漁獲の主体は、15cm以下の0歳魚(2003年級群、今後の見通しでは1歳魚、以下同様)と15～20cmの1歳魚であった。マサバは、海域により差があるが、全体的には前年・平年並みであった。漁獲の主体は25～28cmの0歳魚と29～32cmの1歳魚であった。ゴマサバは前年・平年を上回った。体長30cm以上の1歳魚が主に漁獲された。マイワシは前年・平年を上回った海域も一部にあるが、全体として低調に推移した。漁獲の主体は13～20cmの0・1歳魚であった。ウルメイワシは山口県で前年・平年を上回ったが、全体として前年を下回り、平年並みであった。漁獲の主体は15～20cmの0・1歳魚であった。カタクチイワシは山口県で前年・平年を上回ったが、その他の海域は平年を下回った。漁獲の主体は5～10cmの0歳魚であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、4～9月期には1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2002年級群の豊度は2001年級群よりやや低いが、2003年級群は2002年級群より豊度が高いと考えられる。2004年級群について、親魚量の水準は比較的高く、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温(東シナ海南部、1月)は、前年よりやや高い程度である(水温が高いと初期生残に不利)。2004年2～3月に行った調査では、前年と同様に東シナ海南部海域に多量の仔魚分布が見られた。今後の漁況によって加入量が大きく変化する可能性も高いが、比較的高い水準が続いている近年の平均的な加入量と見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚(2004年級群)は前年(の0歳魚)より少なく、1歳魚(2003年級群)は前年より多く、2歳魚(2002年級群)は前年より少ないと見積もられる。主に漁獲される1歳魚が前年より多いので、全体の来遊量も前年を上回ると考えられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE(1網当り漁獲量)、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量(参考図参照)は、近年、比較的高い値で安定している。沿岸域の漁況は、来遊量の増加を反映して前年を上回り、沖合の漁況は1・2歳魚を多獲して好漁だった前年並みになると考えられる。

(2) マサバ

例年、4～9月期には1歳魚(豆・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆銘柄の一部)も漁獲される。2002年級群の豊度は低く、2003年級群の豊度は2002年級群と同程度と考えられる。2004年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は依然低く、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温(東シナ海中部、2月)は2002年と同程度なので、2003年級群と同程度と見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚(2004年級群)は前年並み、1歳魚(2003年級群)は前年並み、2歳魚(2002年級群)は前年より少ないと見積もられる。主に漁獲される1歳魚が前年並みであることから、全体の来遊量も前年並みと考えられる。

近年、沖合域・沿岸域ともに、漁況の指標は低い値で推移している。来遊量が前年並みであることを反映し

て、漁況は前年並みで、沿岸域では平年を下回ると考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、4～9月期には1歳魚(豆・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆銘柄の一部)も漁獲される。現在、鹿児島県沿岸域では、2歳(中銘柄)以上が漁獲されており、今後も引き続き漁獲されることが期待できる。2002年級群の豊度は比較的良かった2001年級群よりは高く、2003年級群の豊度は2002年級群よりやや低いと考えられる。2004年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は比較的高く、2003年級群と同程度と見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚(2004年級群)は前年並み、1歳魚(2003年級群)は前年より少なく、2歳魚(2002年級群)は前年より多いと見積もられる。主に漁獲される1歳魚は前年より少ないが引き続き漁獲が期待される2歳魚が前年より多いことから、全体の来遊量は前年並みであると考えられる。

近年、沖合域の指標は、やや低い値で推移しているが、沿岸域(鹿児島県)では変動が大きい。沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況も、2歳魚の分布量が依然多く1歳魚の漁況に関わる海況も比較的良いと考えられるので、好漁であった前年並みで平年を上回ると判断される。

(4) マイワシ

資源は極めて低位である。山陰から九州西・北域ではわずかに漁獲量が上向いているが、資源を回復するだけの親魚量はない。現在、1・2歳魚(2003・2002年級群)が漁獲の多くを占めているが、今後は2001年級群が主に漁獲されるであろう。資源が低位の現在では、まとまった漁場は形成されず、沿岸域で散発的に漁獲されるとみられる。

(5) ウルメイワシ

2003年の加入量は2001～2002年よりも少なかったため、資源はやや減少しているとみられる。今後、4～9月の前半には1・2歳魚(2003・2002年級群)が漁獲され、後半に0歳魚(2004年級群)が加入してくる。対馬暖流域ではカタクチイワシが多く漁獲される年にはウルメイワシの漁獲量が少ない傾向にあり、カタクチイワシの漁況が前年並みであるので、ウルメイワシの漁獲量は前年と同程度であり、平年を下回るとみられる。ウルメイワシは長崎県以南の海域で漁獲されることが多く、この傾向は今後も続く。

(6) カタクチイワシ

2003年の春季・秋季発生群とも、加入量は2001年・2002年の水準を上回っていると考えられる。今後、1歳魚(2003年級群)とともに0歳魚(2004年春季発生群)が漁獲され始める。2004年春季発生群の加入量の水準を予測することは困難であるが、親魚量(2003年級群)は少なくないため、前年・平年並みは見込める。また、水温が高い時にはカタクチイワシの漁獲量が高い傾向がある。今後の沿岸域の水温は「平年並み やや高め」と予報されている。本予報対象海域では、沿岸域にカタクチイワシの漁場が形成されることが多い。

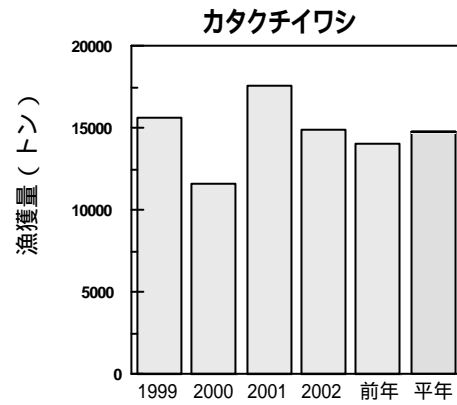
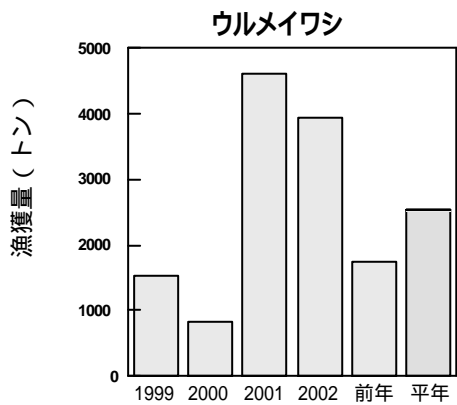
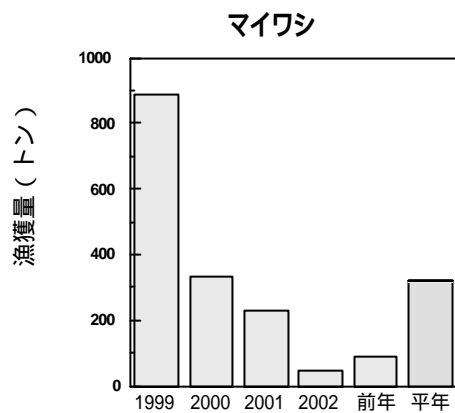
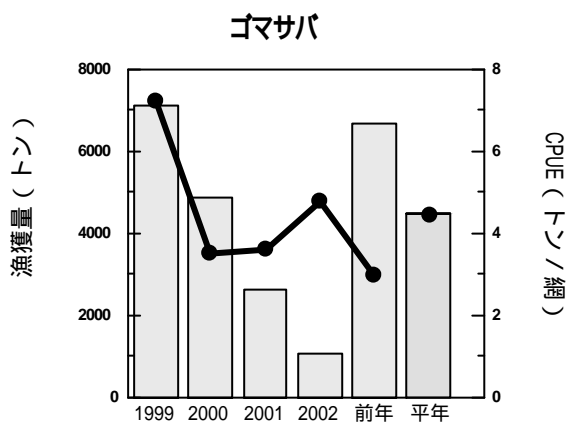
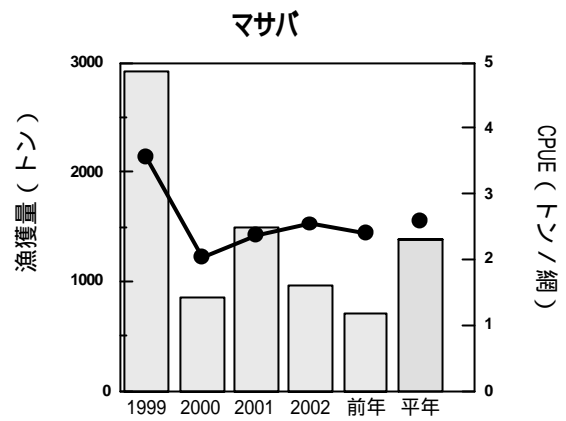
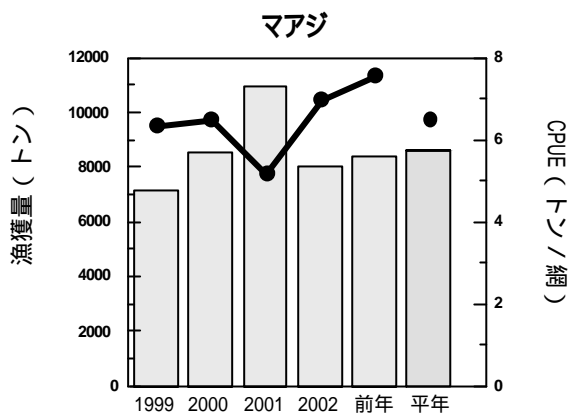
表1. 沿岸域の漁況経過 (2003年10~2004年1月、一部2003年9月と2004年2月を含む)

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	中型まき網で600トン水揚げがあった。これは前年比97.7%、平年比110.8%で前年・平年並みであった。棒受、すくい網では、マアジ当歳魚(ゼンゴ)が10月に2.6トン水揚げされており、前年比253.8%、平年比50.4%と前年を上回ったが平年を下回った。	中型まき網で562トン水揚げがあった。前年比106.7%、平年比129.1%で前年並みで平年を上回った。棒受・すくい網ではギリサバが10月に2.7トン水揚げされており、前年比9.5%、平年比12.8%で前年・平年を下回った。	
福岡	平年に比べ好漁、代表港まき網漁獲量は343トンで平年比140%。銘柄はマメと大・中が主体。同じく棒受網は101トンで平年並みであった。銘柄は大中とマメが主体であった。	代表港まき網の漁獲量は708トン。平年比220%、前年比170%と多かった。まき網ではマメ銘柄、棒受網では小銘柄が主体であった。	代表港におけるまき網の漁獲量は約8トンで平年比8%と著しく不漁であった。
佐賀	漁獲量は前年・平年を上回った。(前年比143.9%、平年比146.1%)	漁獲量は前年並みであったが、平年を下回った。(前年比84.6%、平年比35.9%)	
長崎	地域により差があるが、概ね前年・平年並みであった。(前年比104%、平年比90%)	地域により差があるが、概ね前年並みで、平年を下回った。(前年比113%、平年比79%)	
熊本 牛深港	水揚量が235.2トンで平年比81.1%、前年比172.6%と増加した。	水揚量は247.5トンで平年比199.1%、前年比5.5%であった。	
鹿児島	10~12月は、豆アジ(2003年級群)及び小アジ(2002年級群)主体に、1月は豆アジ(2003年級群)主体に推移した。期間中合計801トンの水揚げで、前年比53%、平年比53%。 (定置網8港計) 147トン、前年比97%。		10~1月は、前期に引続き、ゴマサバ中(2002年級群)主体に好調に推移した。1月までの期間中、3,684トンの水揚げで、前年比658%、平年比249%。

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	10月 11月に湊地区の棒受網で中羽・ヒラゴ(ヒラゴ97%)が18トン水揚げされた。水揚量は、前年比210.3%、平年比141.9%と前年・平年を上回った。	10月 11月に湊地区の棒受網で大羽・中小羽(中小羽98%)が640トン水揚げされた。水揚量は前年比215.2%、平年比179.1%と前年・平年を上回った。	湊地区の棒受網で、中小羽・カエリ・シラス(67.5%:14.5%:18.0%)が569トン水揚げされた。水揚量は前年比664.8%、平年比274.4%と前年・平年を上回った。
福岡	9月代表港のまき網においてわずかに漁獲されただけだった。	代表港まき網の漁獲量は4トン。前年比70%、平年比250%の漁獲であった。しかし棒受網では全く漁獲が見られなかった。	代表港まき網ではまったく漁獲されず、著しい不漁であった。同じく棒受網の漁獲量は、5トンで前年比78%、平年比25%と著しい不漁であった。

佐賀	漁獲は全く無かった。	漁獲は全く無かった	後期の漁獲量は前年並みであったが、平年を下回った。 (前年比 113.5%、平年比 73.3%)
長崎	前年同様、漁獲は低調に推移した。	前年・平年を下回った。(前年比18%、平年比25%)	地域により差があるが、概ね前年を上回り、平年を下回った。(前年比251%、平年比75%)
熊本 牛深港	水揚量は 0.20 トンで平年比 0.054%、前年比 277.8%と増加した。	水揚量は、326.9 トンで平年比 337.2%、前年比 94.4%であった。	水揚量は 36.1 トンで平年比 27.8%、前年比 58.6%であった。
鹿児島	まとまった漁獲はなかった。0.0 トンの水揚げで、前年比 21%、平年比 0.1%。	中羽ウルメ(2003 年級群)主体にまき網では 59 トンの水揚げで、前年比 9%、平年比 10%。 棒受網では 8.9 トンの水揚げで、前年比、平年比 69%。	1 月までは、まとまった漁がなかった。期全体でまき網では 121 トンの水揚げで、前年比 %、平年比 10%。棒受網では 23.6 トンの水揚げで、前年比 2,507%、平年比 57%。

注：「前年」は 2002 年 10 月～2003 年 1 月、「平年」は過去 5 年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1網当たり漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県（ゴマサバを含むが主にマサバ）、ゴマサバは鹿児島県（マサバを含むが主にゴマサバ）、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。